

多作目生産地域における類型間補完結合

中島健吾（福岡県農業総合試験場）

NAKASHIMA, K. : Complementary Combination among Various Types of Farming in the Area producing Many Agricultural Enterprises

今日の生産力段階と構造変動の下で個別経営あるいは地域農業を安定的に存続、発展させるためには、一定の地域的広がりの中で組織化された地域農業複合化としての展開が必要であるとされ、そのための推進研究が全国的に実施されているが、福岡県が研究対象とした甘木市三奈木地区は、地域農業複合化としてあまり展開せず、異なった経営類型間あるいは農協生産部会間での経営諸資源や副産物を相互に協力、援助し合う類型間補完結合によって個別複合として展開している。そこで、その結合の実態と問題点、今後の展開方向を明らかにする。

1. 地域の経営方式とその経営構造

調査農家129戸を家族労働力の就業構造、土地所有の形態、機械の装備状況などによって、専業、第1兼、第2兼、作業委託、経営委託に類型区分した。その結果、施設ナス、植木・苗木、酪農、タバコなどの商品作目を主幹部門とする専業農家は45戸（35%）で、これらの農家はある程度の規模、労働力、担い手などが確保され、積極的に営農を展開している。一方、営農意欲を失ないつつある第2兼、作業委託、経営委託などの農家は73戸（57%）あり、第1兼農家が11戸（8%）しかいないことから、専業農家と第2兼以下の農家階層とに著しく分化、分解していることを示唆している。

この地区は、山間山麓から畑灌台地、水田平坦まで含まれた地域条件を生かして、古くは野菜、植木・苗木、ぶどう、タバコ、米麦など多作目生産が行われていたが、現在においても酪農家を除いて複数の作目、部門を導入した複合経営として展開している。

2. 類型間補完結合と問題点

土地利用は、高地価という現状のもとで、専業農家が主幹部門の規模拡大、輪作体系の維持、酪農家の粗飼料確保のため、第1兼以下の農家階層から個別相対による借地、期間借地、交換耕作などによって耕地の確保に努めている。植木・苗木農家は、自作地が191aと大きいにもかかわらず63aの借地を行っており、それも集落内に同質的な農家が多いため、集落外からの借地の比重が高くなっている。施設ナス農家は露地ナスを組合せており、その輪作体系のため26a借地しており、酪農家は搾乳牛31頭の規模で、自作地が135と小さく、粗飼料確保のため借地47a、期間借地84aを行っているが、それでも搾乳牛1頭当たり年間粗飼料栽培面積は9aと少ない。地代は、ハウスや植木・苗

木圃場が米8俵から転作奨励金を差引いた水準、輪作体系維持のための圃場が4.5俵、飼料作物圃場がそれ以下の水準となっている。このように専業農家間での土地需要の競争が生じ、借地料の決定と借地による圃場の分散が問題となっている。

労働力利用は、共同作業が農協ナス部会によるナス育苗と酪農家2～3戸によるサイロ詰めや稲わら収集にみられる。ナス共同育苗は育苗労働の節減、他部門の規模拡大と共に、共販による品質の統一と出荷調整のためである。また酪農家同志の共同作業は、5～6月における飼料作物の刈取り、サイロ詰め、期間借地条件としての耕起返し、田植などの春作業、及び10～11月における稲収穫、稲わら収集、飼料作物のため耕起、は種などの秋作業の労働ピークを切り抜けるための方策である。なお、雇用は植木・苗木・苗木農家が2～4月の植付、移植、掘取、出荷などの作業に平均225日導入しており、今後の雇用確保に不安をもっている農家が多い。

機械・施設利用は、米麦用の機械はほとんど個別で装備しており、共同所有があっても親戚関係や事業で導入されたトラクタ、堆肥舎である。酪農家の飼料作物関係の機械は同志農家2～3戸の共同で所有、利用、作業とも行っている。米麦の作業受託農家は12戸程度いるが、これは近い将来借地としての確保や酪農家における稲わら確保のための手段と思われる。

副産物利用は、酪農家の粗飼料基盤が弱いため、耕種農家の稲わらや野菜の残渣と牛ふん尿とを交換しているが、その稲わら収集、牛ふん尿散布は酪農家が実施しており、酪農家にとっては過重労働となっている。

専業農家の生産力をさらに安定的に發揮するためには、第1に専業農家間での土地需要の競争をどう調整するかである。現在、個別相対によって借地や期間借地による耕地の確保に努めているが、圃場の分散という矛盾は解消されおらず、事例的に少ない交換耕作をさらに組織的に行う体制が必要である。第2に、酪農経営を地域農業の中でどう位置づけるかである。畜産部門をもたない耕種農家にとっては、地力維持増強としての牛ふん尿が必要である。しかし酪農家には粗飼料基盤の弱さやふん尿処理労働の負担過重などの問題をかかえており、酪農家のより安定的発展をはかるためには耕種農家との有機的結合が必要である。